令和８年元旦

新年のご挨拶

新年明けましておめでとうございます。
AFICS-Japan 会員の皆様におかれましては、健やかに新しい年を迎えられたことと、心よりお慶び申し上げます。

昨年末、成田からチューリッヒへ向かう機中で、映画『2001 年宇宙の旅』を久しぶりに鑑賞する機会がありました。半世紀以上前に制作された作品でありながら、人間と人工知能、そして「判断」と「責任」の関係について、今日の国際社会に極めて重要な問いを投げかけていることに、改めて深い印象を受けました。

作中で描かれる人工知能 HAL は、冷静で合理的な判断を下しますが、その過程で人間の生命を犠牲にすることをためらいません。そこに示されているのは、「意識」や「知能」がどれほど高度であっても、「良心」や「責任」を引き受ける主体でなければ、人間社会を支えることはできない、という厳しい教訓であるように思われます。

今日の国際社会においても、効率や力、計算が優先され、人間の尊厳や倫理的判断が後景に退きつつある場面を、私たちは少なからず目にしています。近年、とりわけ懸念されるのは、国家の指導者の中に、まるで HAL のような AI エージェントのごとく、データや戦略計算、即時的成果を最優先し、行為の倫理的帰結や人間的責任を顧みない意思決定に傾きつつある姿が見受けられることであります。
だからこそ今、長年国連や国際機関で実務を担ってきた私たち元国際公務員一人ひとりが、人間の尊厳とは何か、国際社会における責任とは何かを、改めて静かに問い直すことが求められているのではないでしょうか。

とりわけ深刻なのは、国連憲章の精神と規範に反して、一部の大国が軍事力の行使によって国際法を事実上無視し、既成事実を積み重ねている現状であります。このような状況を前に、国際社会の平和と安全を守るべき国連安全保障理事会が、十分にその責務を果たせていないという現実を、私たちは率直に受け止めなければなりません。世界の平和を求める声をより正当に反映させ、国連憲章に基づく集団的安全保障を実効あるものとするためには、安全保障理事会の改革が不可欠であります。

その際、日本に求められている責任は、単に自国の地位や国益の観点から改革を論じることではありません。国連憲章の理念と国際社会全体への責任を踏まえ、世界社会の住民一人ひ

とりが安全で安心して暮らせるよう、「人間の安全保障」を最重要の価値として位置づける安全保障理事会へと改革を導いていくことであると考えます。私たち AFICS-Japan の会員も、それぞれの経験と知見を生かし、こうした方向性を静かに、しかし粘り強く社会に伝えていく役割を担っているのではないでしょうか。

なお、私事で恐縮ではございますが、昨年 11 月、瑞宝中綬章を授与していただきました。この栄誉は、私個人に対する評価というよりも、日本人が国際機関の一員として、国際平和と国際協力のために長年にわたり果たしてきた貢献の意義が、改めて認められたものであると受け止めております。国連をはじめとする国際機関の現場で、目立たぬも誠実に責務を果たしてきた多くの日本人の努力と志を代表してのものであると考え、身の引き締まる思いでおります。

AFICS-Japan は、単なる親睦団体ではなく、国連の理念と精神を体現してきた経験を、次の世代と社会に伝えていく責務を担っています。技術や制度がどれほど進歩しても、最終的に世界の方向を決めるのは、人間の良心と勇気であるということを、私たちは自らの歩みを通じて知っています。

本年も、会員の皆様とともに、国連の原点である人間の尊厳、多国間協調、そして倫理に根ざした国際協力の重要性を、静かに、しかし確かに発信していきたいと存じます。

2026 年が、会員の皆様お一人おひとりにとりまして、健康に恵まれ、心豊かで、意義深い一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

令和八年 元旦

AFICS-Japan 会長
長谷川 祐弘